

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第196号（2022年9月）

常世の風に吹かれて呟いて（4） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を

抜粋して連載します。）

『突然の雷雨過ぎて秋の風』

（2012年9月4日）

夕方から突然雷雨となった。我が家の近くは雷の声程には雨は降らなかったが、里山方面はかなりの雨が降ったに違いない。その所為か今は秋の涼風が吹いて快適そのものである。虫の音が高く聞こえているので、雨はもう上がるのだろう。

快適な夜気なのであるが、お犬様はまだ警戒心を解かないで、足元にピツタリくつついて離れようとしなない。

このまま涼しい秋となってくれると有難いのだが、まだ暫くは暑さが続くらしい。小生、暑さがどうも苦手で、いくら寒くても冬の方が好きである。大阪に生まれたが空襲で焼け出され、母方の北海道に疎開して以来、高校を卒業するまで寒冷地にばかり暮らしてきた所為もあるのだろうか、暑さにはめっぽう弱い。冬には風呂から上がると、着替えの終わらぬうちからタオルが棒のように凍ってしまう寒さであっても、暑いよりは良い。

本当は仕事を止めたなら、北海道か飛騨は北アルプスのふもとにでも住むつもりでいたのであるが、日本で一番穏やかな気候の茨城県に住むことにな

ってしまった。老後の暮らしの気候としたら良いのであるが、気分の引き締まりが起こらないのが難点である。

昨日は、ギター文化館へ稽古に出かけたが、途中の稲田はもう刈り取りを待つ様子だった。今年の出来はどうなのだろう。もう少しすると新米が食べられる。歳をとってくると、季節季節の食いが気になって仕方がない。旬のものを口にするたび持病の糖尿病が恨めしくなる。

『陽が落ちて秋風の吹く 虫たちの饗宴喧し』

（2012年9月13日）

日中の暑さは真夏以上。陽が落ちると吹く風には秋が捕まっつてやって来る。虫たちの声はいっそうに高く喧噪。

今日は、朝早くからお犬様にシャンプーをしてやる。涼しいうちと思っていたのだが、ドライヤーをかける頃（8時半）にはもうガラガラの日差しで汗だく。先日、吸水性の高い特性のタオルを買ってきて、それですす拭きをしたのであるが、



（絵： 兼平智恵子）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

これが実に良く水分を吸い取ってくれる。我がお犬様ほどの毛の量の犬だったら拭くだけで乾いてしまいそうなほどである。もっと早くに買ってくれば良かったと反省しきり。小生の歳になるとなかなか新しいものの機能を信頼できないで、使い古して擦り切れそうなバスタオルが一番水分を拭き取ってくれるとばかり思っていたのだが、このバスタオルは新製品のほうが良い。

綺麗になったことが分かるのか、庭の方が涼しいぞと言っても家に入るといふ。家に入ると、お犬様が寄って来て臭いを嗅いでいた。お犬様に「耳ちゃんもシャンプーする？」と声をかけた途端、サツとどこかに行ってしまった。

足元にピツタリと張り付いて寝ているが、サラサラとした毛ざわりで気持ちが良い。時々リンスの香りがフワツと伝わってくる。

庭では小さな秋風に虫達が饗宴している。

異説 三味塚古墳「風の姿」II

兼平智恵子

当会報先月八月号にて紹介しました三味塚古墳「風の姿」には筑波嶺の恋歌として詠まれた万葉の歌が織り込まれています。

今回はその中から九首の万葉の歌とその万葉の歌を小林幸枝さんが手話で舞った時の背景書画も添えてご案内します。

はじめに 和歌の起こり

日本の古典を読む④ 万葉集より抜粋

日本最古の和歌集であると言われている「万葉集」は、制作年代のわかる歌として一番新しいのは「万葉集」の巻末歌（巻二十の四五二六番歌）、天平宝字三年（七五九）正月一日、大伴家持の作です。凡そ舒明天皇（在位六二九〜四二）の頃から、天平宝字三年まで、飛鳥時代から奈良時代中頃迄の約一三〇年間に「万葉の時代」です。ではなぜこの時代の和歌が「日本最古」となるのか、それは「日本」も和歌もこの時代に作られたものだからです。遣隋使の派遣（六〇〇年）以来、大宝二年（七〇二）の遣唐使の派遣と七世紀を通じて固められてきた律令・戸籍・都城・史書など集権的な国家体制の根本が、一斉に整えられました。

五―七の定型を持つ和歌もまたこうした中で生み出されたと考えられます。それまでも歌はありましたが「古事記」「日本書紀」に出てくるような不定型の歌謡であったはずで、歌詞に内在的なリズムを持つ和歌の形式は宮廷内部で意図的に作られたと考えてよいと思います。つまり和歌は、新しい国「日本」にふさわしい文学として創造さ

れたのです。

それでは「日本」という新たな国号で新しい国で生まれました万葉の歌、故白井代表が書き下した「風の姿」の文中より。

●筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど

君が御衣し あやに着欲しも



（筑波山の春の繭でつくった立派な着物はあふけれど、そんなものよりも私はあなたの着物を敷いて一緒に夜を過ごしたい）

●筑波嶺に 雪かも降らる いなをかも

愛しき子ろが 乾さるかも



（筑波山に雪が降っているのかな。いや、そうではない。愛しいあの娘が布を乾しているのかもしれない）

●筑波嶺の 嶺ろに霞居 過ぎかてに

息づく君を 率寝て遣らさね

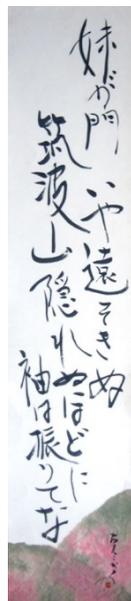


（筑波山に霞がかかって揺れているように、あなたの側を離れられずのために息をついているあのお方。私

の床に誘い込んでから帰そうかしら）

●妹が門 いや遠そきぬ 筑波山

隠れぬほどに 袖は振りてな



（愛しい人の家がどんどん遠のいてしまう。筑波山の影に隠れて見えなくなるまに、手を振って思いを伝えよう）

●筑波嶺に そがひに見ゆる 葦穂山

悪しかるがも、さね見えなくに



（筑波嶺から振り向けば見える葦穂山、その名のように、悪しと思われるところなど、あの娘には少しもない。忘れることなどできるはずもない。）

●筑波嶺の 岩もどろに 落つる水

よにもたゆらに 我が思わなくに



（筑波山の岩も轟くばかりに流れ落ちる水。その滝壺の水のように私の気持ちは少しもゆらくことはいりません）

●さ衣の 小筑波嶺ろの 山の崎
忘れ来ばこそ 汝を懸けなはめ



(突き出した筑波の山頂よ、我が愛しい妻よ、お前を忘れて行けるものなら、お前の名を口に出して未練を言うこともないだろうに…)

●小筑波の 嶺ろに月立し 間夜は
さわだなりぬを また寝てむかも



(筑波の嶺に月が出て、あの娘に逢えぬ夜は積もりに積もってしまった。もう一緒に寝たつていいじゃないか)

●小筑波の 茂き木の間よ 立つ鳥の
目ゆか汝を見む さ寝ざらなくに



(小筑波の茂った木の間に飛び立つ鳥を見るように、お前を目で見るだけにいなければならぬのか。

共に抱き合った仲ではないか)

以上、男女の恋の歌「相聞歌」如何でしたか。

○即のウクライナ進攻行停止コスモスゆれる

智恵子



(ちえこ)

我が人生の回想 8

木下明男

少年期(就職)から青年期へ・・・?

昭和34年4月社会人としての第一歩が・・・?
東京の南部にある老舗の光学会社、入社式が父兄同伴(技能者養成所)で・・・。新入社員は大学卒数名、高卒数名、養成所(中卒)30名が集まる。
この年昭和34年(1959年)は日米安保条約批准の前年で、頻繁に安保反対デモが国会を目指していた。(翌60年には東大生がデモで死亡)この条約が何かは、よく理解できないながらも、深い興味を感じたのを覚えている。また此の年には、皇太子(平成天皇)が一般女性(日清製粉令嬢)と結婚する話題で世相が盛り上がっていた。私も

大変興味があり、皇居近くまでパレードを見に行つたものです。わたしの初任給は6500円(月2回に分け支給)この頃は全員が現金支給、給料は袋ごと親に渡し、その中から500円を小遣いとして・・・。

まじめに働けば、順調に出世して何れは部長社長になれると信じていた世間知らず(純情少年)。これ等の夢想は、働き始めて数日で打ち砕かれたものです。また、小・中学校では成績も上位でしたが、東京都内各地から集まった仲間たちの能力には、脅かされたものです。30人の中の成績は、相当に下位クラスだった。入社初年度は、環境や体力も含めて夜学は原則禁止、従って2年目より都立高校に通い始めた。そして3年間、昼は現場実習と勉強(高校教科)夜は定時制高校で学習、充実(?)した日々だった。定時制高校での成績は優秀でした。(ダブルで勉強しているのだから当然か?)テレビの普及が急速に高まり、我が家でも茶の間にテレビが登場。TVニュースでは、連日に渡り安保条約反対デモの様子が放映された。国会で強行採決した岸内閣への大変な抗議行動が行われ、総辞職に追い込まれた。1960年の年は、社会党委員長の浅沼稲次郎が右翼の少年により刺殺された。アメリカでは、史上最年少のケネディが大統領に選出された。数年後暴漢により暗殺された。1964年東京オリンピックが・・・各家庭には、テレビが普及する。
養成所期間中、お酒は飲まなかったが友人たちに感化され喫煙を始める。入社3年後には、養成所の卒業式が(修学旅行まであった)あり、現場に配属される。配属の決まった昭和38年(1963年)4月には、配属先の職場で歓迎会が行われ、

諸先輩から歓迎のお酌（非公式）が次々・・・？当然返杯をして、歓迎会が終わるころには、先輩たちは潰れていた？それ以降酒豪のレッテルが張られた。現場配属から2年間、定時制への通学があり余り遊ぶことはなかった。此の年の5月3日、史上最大の列車事故（三河島脱線衝突事故で死者160人）があった。この事故は午後9時半ころの常磐線下り、上りで起きた事故・・・。平日なら学校帰りに利用していたので巻き込まれた可能性が・・・助かった。高校時代は、写真部に入部・・・後半は山岳部に入り、北アルプス等を制覇。高校卒業と成人が同じだったが、今後の生き方については定まらず？漠然と大学受験を目指す。何と無く弁護士希望で中央大学を受験、英語が全く出来ず失敗。一念発起で、英語克服のため米語会話塾に通うが、遊びに（麻雀と飲み屋）感けて僅か3年で断念。社内クラブのソフトテニス部に入ったが、素質が無く長続きせず。それ以降は、時間が有り余るほど・・・数年に渡り、麻雀（給料1ヶ月分稼いだ）や日々ショットバーや焼き鳥屋通い。成人と共に、人それぞれ変わっていく・・・。養成所の同期生は10人近くが退社、それぞれの夢を追って社会に旅立つ、届いた知らせは黒い縁取りが・・・（教人）？



(みつえ)

地域に眠る埋もれた歴史（84）

木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】（10）

二人の唯信房（1）

幡谷の唯信（鉾田市）

親鸞聖人の弟子二十四輩の二十二番と二十三番は共に「唯信房」と言います。二十二番は「戸森の唯信」で二十三番は「幡谷の唯信」と呼ばれています。まずは二十三番の唯信房の寺である水戸の歴史観近くにある「信願寺」を紹介します。この唯信は「幡谷（はたや）の唯信（ゆいしん）」です。



幡谷と言うのは石岡の近く小川町入口にある幡谷のことです。

水戸の歴史館のすぐ近くです。この寺は、創建は貞永元年（1232）に幡谷に創建され、延宝9年

（1681）に現在地に移ってきました。

本尊の鍍金仏は鎌倉時代に制作されたと推定される仏像で像高46.7cm、銅造、鍍金、長野善光寺本尊を模した善光寺式像の中尊とされ昭和29年に茨城県指定重要文化財に指定されています。（茨城県水戸市観光・旅行見所ナビより）



ここにおかれている親鸞像は他のものと少し違います。

この像は親鸞と妻の恵信尼、息子の信蓮房（明信）という家族の銅像です。

越後から常陸へと旅をして来た、親鸞一家の姿として描かれています。

この像の下には次のように書かれた銅板が取り付けられています。

「むかし野に聖あり。公家をすてて仏道をもとめる。」

山上に心月を仰がれずして、救いを慈悲の精舎に祈る。

生と死のいづべき道をききて、俗と僧をこえて凡人となる。

暴力には、慈悲の心をもて向う。

心暗きものに智慧の道を示す。

乏しきに交わりて心豊かに、力なき人民とともに生きる。

その心太陽のごとく、そのあたたかさ、母のごとし。

悪しき心の性を人に見づして、自からの暗の深きを恥じ入る。

その子に背かれ妻に別れ、市辺の一隅にあつて真実を書く。

濁り多き世に生きる。

濁りなき世の来らん日のために、自ら燃えつくした人。

野の聖、親鸞という。

京都山科にて。高下恵証。」

親鸞は越後で妻「恵信尼（えしんに）」と結婚し、

4男3女をもうけました。息子信蓮房は越後で生まれ、常陸国に来た時は3歳くらいと思われませんでした。

親鸞は40歳で越後での法難から解放され、常陸にやってきましたのは42歳の時だと言われています。

越後で妻を持ち、妻と幼子を連れて京には戻らず、常陸国に何を求めてやってきましたのでしょうか。

師法然は親鸞より40歳も年上。

常陸国の布教の中心となつたのは稲田（現笠間市稲田）の草庵でした。

この場所で浄土真宗の聖典になる「教行信証」を表したと言われており、弟子といわれる人も70人近くにのぼつたそうです。

そして20年にわたる常陸国での布教活動を弟子たちにゆだね、京にもどつたのは62歳の頃です。

しかし関東に残した弟子たちが流布する親鸞の教えが少しずつ自分の考えと離れ始めていきます。

そこで自分の長男の「善鸞」を遣わせて正しい道を伝えようとしますが、常陸国にやってきた善鸞は、なかなか言うことを聞いてくれないので親鸞から全権をまかされたと流布します。

そこで、親鸞は長男「善鸞」を義絶（親子の縁を切る）したのです。

親鸞は京での身の回りの事は一番下の娘が付き添つており、90歳で亡くなったとされていますが、この善鸞を義絶した事を知つた弟子たちが親鸞の元に駆け付けます。

そして親鸞から関東での異説のどこがいけないのかの教えを受けます。

その弟子の中の一人唯円がこの親鸞の教えとして「歎異抄」を書いたのは親鸞没後30年くらい経つた頃と言われています。

さて、この水戸の信願寺は幡谷（はたや）の唯信（ゆいしん）が旧小川町（現小美玉市）の幡谷に建てた後に、数か所を転々として江戸の初期の

1681年に現在地に移つたといわれています。

幡谷の唯信は鎌倉時代に幡谷城の城主であつたのではないかともいわれ、武士だったようです。名前は幡谷信勝。

現在水戸の「信願寺」以外に日立市金沢町にある「覚念寺」の2か所がこの唯信の寺だと言われています。

こちらの覚念寺に伝わる唯信は那珂郡小瀬（現常陸大宮市）に覚念寺を建て、西暦1600年に日立市に移つたとされ、佐々木四郎高綱（宇多天皇から源氏姓をもらう）の三男、左衛門尉源高重という武士であつたと伝えられています。

所変われば内容も随分違います。

さて、話を戻して幡谷という名前が気になっていきます。

これは旧小川町の幡谷地区の近くには、親鸞の通過した記録と言うようなものがたくさん残されています。

特に「喜八阿弥陀」には親鸞直筆の絵画三幅が残されています。

前に記事を書いた時はこの絵も信憑性に疑問があると思いましたが、この時代にこの幡谷の唯信がこの地で布教し、親鸞も鉾田方面の幽霊図で有名な「無量寿寺」にも何度も足を運んだことはわかっていきます。その時にはこの道を何度も通つたの

かもしれませぬ。

この近くにこの喜八阿弥陀堂の「長島喜八」さん

の奥さんが難産で死亡した時に怨念となつて現われた幽霊を鎮めた経塚も残っています。

親鸞が暮らした稲田の草庵（西念寺）からこの地を通り鹿島などへ何度も通つた道なのでしょう。

これらの関係が今までわからなかったのですが、あまりにも知られていないのがとても不思議です。幡谷というところは茨城県信用金庫（けんしん）生みの親が幡谷氏であり、小川町の町長時代に百里基地を誘致し、今はその半分が茨城空港ができています。空港の一角にこの幡谷氏の銅像が建てられています。

また、幡谷城についてはまたよくわかつておらず、鎌倉時代に幡谷氏が治めていたが、小川城（園部氏）の支城となり、戦国末期には最初は味方であった石岡の大掾氏とも敵見方となり争い、天正18年（1590）に佐竹氏に皆滅ぼされたのだらうとおもわれます。

二人の唯信房（2）

戸森の唯信（笠間市）

親鸞聖人の弟子、唯信のもう一人は、二十四輩の第二十二番「戸森の唯信」と言います。

戸森とも外森または戸守などとも書くようです。幡谷の唯信（二十三番）を紹介したので、もう一人の唯信に興味を持ったのです。

この二十二番「戸森の唯信」が建てた寺と言うの

が笠間市の宍戸駅近くにあります。「外森山唯信寺」という。



この宍戸という土地は江戸時代には石岡と同じく松平氏の藩（1万石）があり、殿様は江戸にいてここには陣屋があった。

その前の時代を考えるにもこの戸森の唯信と言う存在を考えてみるのはとても面白い。

しかし、この宍戸駅周辺のエリアが国道50号線から外れ、笠間や友部に行くにも通ることのないデルタ型のエリアになっており、石岡に住む私などは近いのに全く行けなかったことがない。

場所は宍戸駅の北側で北山公園の南側である。

この唯信房は、宍戸の城主宍戸四郎知家の三男、山城守義治だという。

宍戸四郎知家というのは一般に言われている八田知家の事だと思う。



ここはただ桜も有名らしい。また春にでも来てみたい。

この唯信寺は最初に奥州外森に建てられたというが、この場所が良くわからない。

この時代に奥州というのは東北地方ではなく、常陸国の北部であるようだ。

しかし久慈郡にはそれらしき地名が見当たらない。この唯信は、宍戸四郎知家の三男山城守義治だといひます。

常陸国守護であった八田知家が宍戸に移つて宍戸氏を名乗り宍戸氏が始まったのです。

この八田知家の三男がこの戸森の唯信だと言うのです。

この時代に若くして親鸞を訪ね、その教えに従っていつも付いて回っていたようです。弟子となったのは22歳だというので、他のお弟子さんよりはかなり若いです。

そして、常陸国の北の奥の方まで布教に訪れます。

(76歳で亡くなった)

そんな奥州の外森(戸森)に布教のための道場のようなこの唯信寺を建立したのです。

でもこの外森(戸森)が何処なのかは判明していません。

少し調べてみると、やはり戸森の唯信などといわずに宍戸の唯信と言ってくれた方がわかりやすい。ここにある親鸞像は「お旅立ちお姿」となっている。



小田氏、八田氏、宍戸氏はみな同族ですが、新善光寺を信仰していました。

日本最古の仏像と言う長野の善光寺仏(三尊)を

信仰していたと思われま。

石岡の善光寺のもうその屋根が崩れそうになった本堂の裏手に小田氏の五輪塔がずらりと並んでいます。

楼門のみが文化財として指定され、歴史が泣いているように思います。

宍戸にあった新善光寺は宍戸知家の子供が建立したとされ、この信仰がかなり厚かったが、宍戸氏が佐竹氏の傘下に組みせられて、海老ヶ島城(筑西市)に移されたときにこの新善光寺も移されています。

新善光寺信仰とこの親鸞の教えが当時どのような関係にあったかは知りませんが、興味を引きます。さて、この唯信寺の隣に「光明寺」という浄土宗の寺がありました。

唯信寺とは隣り合っていて一帯のような感じですが、こちらの寺も入口にしだれ桜が植えられています。



(よしこ)

妹と姉

伊東弓子

妹とは長い付き合いで八十年にもなる。お互いに影響し合ってきたことだ。助け合ったり、競争し合ったり、疵つけ合ったり、迷惑かけたり、数多いつながりを持っている。年上という位置でできた私はどうしてもリードしたがる場面が多かった。付いてくる下の方は付いてきながら、確り自分というものを作り上げているようだ。今回つくづくその事を思った。

今回の妹の展示会は学ぶことが沢山あった。梅雨といっても気まぐれ降り続くわけでもなく暑さに向かう頃だった。

小池恵子(やすこ) 日本画作品展

—— 八十路を迎えて
六月二十一日(火) ～ 六月二十七日(月)

九時三十分～十七時

照光寺本堂(小美玉市上玉里一一四〇)
駐車場 照光寺本堂前

と題うって妹が一生の自分の体・心の中で懐いていたものを形にしたお披露目であった。
小さい時からのことを思い出してみた。

私は一年生に入っても、名前も書けず、数も百まで数えきれなかった。その傍らで鉛筆を動かしていた妹、終戦二年後、紙も充分な中で「邪魔しないで」と私に怒られながら妹は手がうずうずしていたのだろう。庭で遊んでいても石けり、陣とりの丸や四角を一先に書いてくれた。

妹が一年に入ったばかりの春先、母は具合が悪

く床についた。妹は、水枕をし、氷嚢（ひょうろう）を下げて寝ている様子を絵に書いた。お医者さんもいて、井の中に注射器もあってみんながほめていた。ははも「やっちゃん細かい所を良く見て書いているね」と、ほめていた。私は羨ましいとも思わず聞いていた。

高く広い縁側で寝転んで二人で絵書きやぬり絵をしていた時だった。妹の絵を見て伯母が「やっちゃんの絵は上手だねえ。まるでがでほんのようだね」と、言っていた。「がでほん」という言葉はその時初めて知った。ほめられるのは、いつも妹だと、当然のように思っていた。

弟も小学校に入ってから夏休みは楽しかった。喧嘩もしたが、長い休みはやるのが沢山あった。野山、林を歩いて虫を捕り、昆虫採集・植物採集と盛りだくさん、絵は妹の得意とする分野、時間をかけて構想を練って始める。私は数をこなすという「チャッ、チャカ、チャカ」と急ぐ。又同じ手法では面白くないので筆で景色や物の形をとって、乾いてから色塗りをしていくというやり方をして楽しんだ。夏休みの作品の金・銀賞は妹の絵に貼られてあった。

その頃は、近隣学校との交流も多く、高浜小学校、東大橋小学校、玉川小学校、田余第二小学校などのつながり、共同行事もよく行われた。そんな時の絵のことで受持ちが話した中に「三枚の絵を見てもらったら、絵の先生が、この子達三人は血のつながりがあるのかな。とのことだった。その後二枚を見てもらったら先生言うに「嫁に貰うならこっちの子がいいと、妹の絵の方を選んだぞ。お前は何をして大雑把だから、絵にも表れてんだ。教室内は笑い声でいっぱいだった。私は何

とも感じずうす笑いをしていた。

高校の時だった。絵を描く先生が土浦にいて聞いて、市内の中村という所を訪ねたことがある。自分が教えてもらおう積りはさらさらないが、「妹が絵が好きなので教えていたきたい」とお願いした。しかし、「教える程の力はなく、年も多く九なつて、ただの貧乏絵かきの端くれです。」とおっしゃっていた。その頃の流行語でロマンスグレイという感じの人だった。秋だからと言って尾花・撫子・桔梗の絵をかくて私の名一枚、妹の名を書き入れ、名刺二枚を作って下さった。しかし、その後、その方をお訪ねすることもなかった。

妹は美術のクラブで日本画の腕を磨いていたようだ。仕上げた一枚は源氏物語の中のある姫君の絵だった。その絵を手にして覚えればかりの歌を何度口にしたことだろう。

清き月 石山寺に 筆のあともゆかしや

ものおもい衣(きぬ)を重め 光源氏ものがたり

保育専門学校に言ってから妹はより幸せだったという。保育を育てる専門の先生方に厳しい面、優しい面からの教育を受けたことを誇りに思い自信にあふれていた。素材はどこにでもある。それを活かしていく力はあなた達の能力、そしてそれが子供達の芽、心、想像力を育てていくのだと教わったことの喜びを語る時、私には胸に響き、素直に伝わってきた。妹の自信あふれる言葉から私はいろいろと教わった。

他の保育園で三年勤め、一緒に保育出来る喜びは大きかった。話し合いが充分出来て、お互いに納得しながら保育にあたった。子供への指導、部

屋・園庭の環境づくり、仲間そのがくしゆうに妹の人柄の良さがよく伝わっていた。保育の材料は周りに沢山ある。それに気がつき、活かす力を学びあった。雨上がりの庭で山や川をつくり、百日紅の散った花で人形を描き楽しい保育が進む中でも、時代の流れかアトバイスに耳を背ける仲間も少なくなつたが、めげずにしようじんしていた姿が私の目に焼きついている。わたしのようになり怒りを表わすこともなく、いつときあきらめたり、再度話しをしたり根気づよかつた。

六十才の定年をむかえ、正規の職員としての座を退いてから、白雲荘で行われていた日本画の教室に入った。保育の手伝いも週三日位通い、家庭の一員としても家事の一部、孫との時間もつくり、すべてに確りと向かっていた姿には、あの細い体がと・・心配になる程だった。小林恒岳先生を尊敬して止まなかったからこそ、続けられたのだと思う。白雲荘から市内の公民館に場所が変わつても、小さな車に大きな材料を積んで通う姿は、強い信念が大元にあつて、良い師と良い仲間、環境にも恵まれ幸せを感じた。私もその都度、話しを聞く楽しみが大きく増えた。大きい絵、小さい絵、孫の絵、花の絵、娘の絵、一つ一つに対する母としての思い、祖母としての思い、保母として多くの子に愛情を注いできた表れだと受け取った。花びらをも草や木の葉もいきいきしていた。石岡へ、水戸へ、東京へと会が開かれる度に、妹と一緒に、又友を誘い出かけて行った。私も若く都合も人ごみも交通の賑わいに煩わしくなかつた。これからも寺での生活で慈しみ育てられたものと深い深いものを感じた。

いよいよ展示会が始まった。

幼い時から“絵を描くのが好き”の気持が人生のその時々体験や沢山の人々とのお付き合いの中で六十代に花開いたものだったと思う。

前任職の願いによって本堂を使わせていただいたの開催は、最高だったと思い、有難かった。寺も地域の文化を育てる大切な場と願っている。

今回の作品展、小林恒岳先生は一番先に見ていただきたいかったですことだろうと思う。展示会に来てくださった方は感動の心を言葉を置いていただくかった。

- ・あの絵の中の男の子、連れて帰りたいといっていた方、
- ・山ゆりがいいという女の人たち、夕顔がほしくという男の方
- ・シャボン玉を吹くあの子の頬が動いているみたいだった。
- ・娘二人の仲良しの姿が伝わってくる。
- ・太鼓の音が聞こえてくる宵、孫たちが金魚に興じている一人一人の姿が、表情が何と云っていいかわからない愛らしさね。
- ・お一人お一人がご自分の子育て時代を思い出してくださった。
- ・佛さまの絵の一枚一枚に無限の慈悲を感じた。

多勢の方が来てくださった入口で、私は友と一緒にお一人お一人を迎え、感動の言葉を残して帰っていかれるお一人お一人を見送った。雷電の森の中で紫陽花の優しい色どりに囲まれ、幸せな一週間を与えられ喜びは今迄に経験した事がなかったものだ。

今回の最大の作品は、何と言っても本堂の正面から左右の欄間に彫られた外側の法然上人のご一生、内側の釈迦の一生の彫刻である。細かいこの

下絵を描いたのも妹である。前任職が彫り師にたつて願ひ出、妹の手で描いたものが、もともなっている。妹は四年という年月をかけ、あちこちの寺を歩き、美術館・歴史館を訪ねて描かれた三十枚の下絵をコピーし、説明書を添え欄間と糸でつないで紹介してあった。前任職の力の入れ方にも驚いた。これは今回の展示会の最大の作品と言っている。この寺、本堂の存在する限り、

不滅のものだと感じた。(実際、前の本堂の欄間も含め、現本堂の奥に再現されている)代々大切にしていける気持がつながっていくことが文化であり、歴史だと改めて今回の展示会の意味を感じた。

妹の家族全員で準備、当番、片付けと娘達も遠くから手伝いに来て支えあっていた。小さい頃から願っていた妹は、生活の中から常に描くことを育てていたと思う。すべてがつながっているように思う。八方美人タイプの私と違って、心の奥底で温めていたものをしっかり育てて花開かせた暑い暑い夏だった。

あの日から二ヶ月、ちよつと言ってみた。「今度は老いた姉と妹をかいてよ」「いやだよ」どうしてかな。絵にならないのかもしれない。あの美しかった紫陽花も夏に絶え、秋風を受け色も形も変っている。

追伸

あの絵はどうなるの
お家の物置に片付けたの
譲って貰えるの
寄付して飾ってもらうの

作品の行く末を気にしてくれる声も多かった。

礼状の絵(遠くに盆おどりの太鼓の音が響く、金魚すくいに興じる子たち)は好評だった。大事にします。飾っておいて毎日見えます。

最後まで心をこめてお礼をしたようです。



(さちえ)

伊東甲子太郎

小林幸枝

先日通勤時に、「伊東甲子太郎の石碑」と書かれた新しい看板を見つけ、気になりました。そして次の休日にこの「伊東甲子太郎の石碑」を見に行ってきました。

場所は旧志筑小学校跡地(志筑城跡)です。



この石碑は、旧中志筑村(現かすみがうら市)出

身で幕末の新選組参謀だった伊東甲子太郎(かしたろう)(1835~67年)の生誕の地を多くの人が知ってもらいたいと、地元有志が建立したものです。中志筑のこの志筑城跡で、「生誕の地」記念碑の除幕式が行なわれました。

歴史のロマンを感じてもらいたいと思います。



伊東甲子太郎生誕の地は別にありますが、道幅が狭くなっていますのでお車での進入はできません。そのため、志筑城跡でお車を止めて歩いて行くことをお勧めします。

風と共に 《理》(27)

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「刹那」

夏から秋への移り変わりは、様々な音色が教えてくれますね、ヒグラシやスズムシ秋を感じはじめるには、とても贅沢な音色に聞こえます。

新型コロナウイルスについては、変異種が次々と現れ、つい先日には私の家族内でも陽性者が出ました、職場でも次々に感染し続け、その症状が最近となつてはまた酷くなりつつあります。

高熱や味覚障害などこれまでとはまた違った症状で、感染スピードも早くいつ誰が掛かってもおかしくない様な様相となつてきています。

現在症状と戦っている皆さんの、一日でも早い復帰を願っています。

さて、今回は刹那をテーマに私独自の視点からお話しさせていただきます。

刹那とは、言い換えると、極めて短い時間・瞬間と言えるでしょう。

私も含めて、生きとし生けるもの全てが平等に、この刹那の積み重ねにより、日々を過ごしている訳ですが、連続した刹那がその個体の過去でも未来でもある訳です。

すなわち、様々な刹那をその都度判断して積み上げた結果が今のそれぞれが立たされている場所な

のです。

時間は有限、ただ椅子に座ってポーツと、その時間を過ごすのも、忙しく働くのも、美味しい物をいただくのも、苦しく辛い時間を過ごしていくのも、有限の時の中で自分が望んで居る場所、感覚、思考

巡り巡って辿り着く、あるいは必然に。

どうして私はいつもこんな思いをしなければならぬのか、
何でこんなに運が良いんだろう、
ただ何もしない幸せ、

この苦痛はいつまで続くのか、

みなさんは望んでその時にいるのです。

誰かが陥れる、誰かの助けでこんな素敵な事が、
誰にも干渉されずに自由に、
全ては巡り巡って、自分が招いたのです。

心当たりありますよね??

嫌なと事、都合の悪い事、すぐ忘れるんです。でも、よく思い出して下さい。

いくら今覚えていなかったとしても、消せる訳じゃ無いんですから、甘美な記憶は必ず何処かに保存されているはずですよ。

兎も角、今いるあなた、わたしの、住む世界・立場・状況は、全てあなたが積み重ねた刹那の結果だと言うことです。

あの時他人を見捨てて助かった、いつか、誰かから見捨てられて堕ちますよ。

自分が苦しい時にでも、他に苦しんでいた人を助けた、必ずその親切心ほどの様な形であれ、あなたのもとに返ってきます。

今までも何度か皆さんにはこの様なお話をさせていただきましたが、

生き辛い世の中です、誰にとっても、だからこそ人を幸せにする行い、想いは尊いと言えるでしょう。

滅多に出来る事では無いのです、簡単な事でも無いのです、必死な想いがそこにはあるのです。

ですから、今の世では奇跡の様なそんな行い・想いがとても重要だとわたしは思っています。

なんだか常識の無い世の中になって来ましたよね？

って、言うだけの無駄な生き方はもうやめましょうよ、冷静にそんな判断が出来るなら、きつと他の生き方も出来るはずですよ、誰かはきつと自己犠牲の精神を持って、その他大勢を救っているんですよ。

一瞬、瞬間にでも、優しい気持ちに同調、準ずる気持ちをもてたなら、後は踏み出し形にするだけです。

勿論、私自身は踏み出してますよ、人に言うだけでは何の説得力もありませんからね、だからこそ気苦労なのか幸せなのか、充実した毎日は過ごせ

てますよ。

何も出来ないなら、一步踏み出す勇気が無いのなら、せめて、その一步を踏み出した勇気ある人を陥れる様な事だけはしないで下さいね、その刹那があなたを望まぬ状況に追いやる筈ですから。身を持って知る必要は無いと思います。それではまた次月に。



(よしこ)

茨城県の難読地名とその由来 (27)

木村 進

常陸国風土記と地名 (2)

(四) 信太 (しだ)

信太 (しだ) 郡の名前の由来は風土記本文には残されておらず、逸文 (かつては存在していたが現在には残されていないが、他の書物などに引用されて現在に伝わっている文。) にあります。

「白雉4年(653年)に小山上物部河内・大乙上物部会津らが惣領高向の大夫らに要請し、筑波・茨城郡の700戸をもって信太の郡を設置した」

と書かれています。

黒坂命 (くろさかのみこと) が蝦夷の征討へ赴いた。勝利して凱旋の途上、多歌 (多珂) 郡の角枯之山に至ったところで、病にかかり亡くなった。それゆえ「角枯山」を改めて「黒前山」と名付けた。黒坂命の棺を乗せた車は黒前山を発ち日高見国 (美浦村) へ向かったが、葬列の飾り物は、赤い旗や青い旗がとりどりに翻り、雲の如く虹の如くに野を照らして、行く先々の道を輝かせたものである。それを見た人々は「赤幡垂る国」と言い、後に改めて信太国という。

この中でてくる黒坂命は多氏の一族といわれる武人ですが、この常陸国風土記にしかこの名前が登場しません。現在の美浦村から霞ヶ浦を渡って石岡方面に進み、蝦夷を成敗しながら北へ進み、日立市の十王町の山までを征服していった人物と考えられます。

黒前山 (くろさきのやま) は現在日立市十王町黒坂にある「豎破山 (たつわれさん)」のことです。

「豎破山」という名は、山頂に真つ二つに割れた巨石があるところから名づけられたといわれています。この豎破山で亡くなった黒坂命の葬儀の列が向かったのが「日高見国」で、この地は現在の美浦村あたりといわれており、この黒坂命の墓として色川三中は「大塚古墳 (1号)」をあげています。また、当時はこの霞ヶ浦の手前の地である美浦村周辺が「日高見国 (ひたかみのくに)」でした。その後、蝦夷征伐が進むと「日高見国」は徐々に北へ移動して、岩手県の北上川流域になり、北海道の日高地方に移って言ったのではないかととも言われています。

その他に信太郡の所に書かれている地名を挙げておきます。

(1) 雄栗(をぐり)の村：「郡より北十里のところに、碓氷(うすい)碓井」がある。：景行天皇が飲み水に困って井戸を掘らせた場所での井戸が「今でも雄栗(をぐり)の村にある」と書かれています。現在の陸平貝塚(おかだいらかいづか)にある「ぶくぶく」井戸の辺りではないかと見られています。

(2) 高来(たかく)の里：碓氷から西に行くと高来の里がある。：ここで普都(ふつ)の大神が荒ぶる神たちを和めた後で、身に着けていた厳(いつ)の鎧・矛・楯・剣、手に付けていた玉を、すべて脱ぎ捨て、この国に遺して、天に昇り帰って行ったとなっています。

その楯などを脱ぎ去った場所が、楯縫神社や阿彌神社とあるといわれています。

高来の里は現在の阿見町竹来(たかく)のあたりだと見られています。

(3) 榎浦(えのうら)の津：東海道常陸路の入り口で、駅家(うまや)が置かれている。とあり、常陸国に入るにはここで口と手を洗い、香島の大(いま)神(現在の鹿島神宮の神)を遥拝してから常陸国にはいるのが許されたと書かれています。

しかし、この「榎浦の津」がどこに当たるのかはいくつかの説があり判断も分かれていきます。津というので船着場の名前ですから、候補地は稲敷市の「江戸崎」「羽賀浦」「柴崎」などの地名が候補に挙がっています。しかし当時は現在の利根川も大分様子が違っており、大きな内海(香取の海など)が広がっていましたのではつきりとしません。

(4) 飯名(いひな)の社：筑波の山の飯名の神(つくば市臼井の飯名神社)を分祀したもので、現在の稲敷の地名の由来と見られています。ただ、この飯名の社がどこにあったのかは明確ではありません。候補としては龍ヶ崎市中代稲塚にある「稲敷神社」などが候補にあがっています。

(5) 乗浜(のりはま)：倭武の天皇(やまとたける)が海辺を巡幸して、浜にはたくさんの海苔が干してあったので、「のりはまの村」と名付けられた。となっています。

和名類聚抄の郷名に「信太郡乗浜郷」があり、旧桜川村から東村の阿波崎あたりだと思われます。

(6) 浮島の村：乗浜の里から東に行くと、浮島の村がある。霞ヶ浦に浮かぶ島で、山が多く人家はわづか十五軒。七、八町余の田があるのみで、住民は製塩を営んでいる。また九つの社があり、口も行ひもつつしんで暮らしている。となっています。

現在の稲敷市の浮島地区で、今は陸続きですが昔は島でした。

(五) 茨城(いばらき、うばらき)

茨城の名前について風土記には次の二つの説が紹介されています。

(1) 昔、山の佐伯(さへき)、野の佐伯といふ国巢(くず)がいた。普段は穴を掘ってここに住み、人が来れば穴に隠れ、去った後でまた野に出て遊んでいた。：(中略)：あるとき、大の臣の一族の黒坂命(くろさかのみこと)が、あらかじめ彼らの住む穴に茨(うばら)の刺を施し、突然、騎兵を放って彼らを追ひ立てた。佐伯たちは、あ

わてて穴に逃げ帰ったが、仕掛けられた茨の刺がからだ中に突き刺さり、あへなく皆死んでしまった。このときの茨から、茨城の名となった。(佐伯とか国巢というのは原住民のことで、ヤマト朝廷は彼らを征圧した)

(2)、別の話では、山の佐伯、野の佐伯は、山野の賊を率いて自ら長となり、国中を盗みや殺しをして廻っていた。彼らと戦うために、黒坂命は、茨をもって城を造った。その土地の名を茨城というようになった。

これは茨城郡の成り立ちや変遷の敬意から考えて、地名が先でこの由来説はどちらも後から考えた伝承といっていでしょう。その他の書かれている地名について載せておきましょう。

(1) 信筑(しづくの)川：現在の恋瀬川です。信筑は現在のかすみがうら市の志筑のことで、この地を流れる川からついたといえます。

(2) 高浜：信筑川が海(現在の霞ヶ浦)に注いでいるところですから、今の石岡市高浜です。

この地は、花香る春に、また落葉散る秋に、乗り物を走らせ、舟を漕いで出かけるとすばらしい場所だと書かれています。

(3) 桑原(くわはら)の岡：郡より東十里のところ、桑原の岡がある。：旧玉里村の大宮神社あたりだと思われます。

(4) 田餘(たまり)：昔、倭武の天皇(ヤマトタケル)が桑原の岡の上に留まられたとき、神に御食を供へるとともに水部に新しい井戸を掘らしめた。この清く香くはしい泉の水をおいしさうに

飲み干され、「よくたまれる水かな」とおっしゃったので、この里の名を田餘といふやうになった。この井戸の跡地とされる場所は現在の大宮神社の裏手にあります。現在の小美玉市の玉里地区の旧玉里村は、1955年に田余村と玉川村が合併した時に「玉里村」となりました。

(5) 佐礼流海(さがのうみ)・・茨城郡の範囲として東は香島郡(鹿島郡のこと)、南は佐礼流海、西は筑波山、北は那珂の郡なりと書かれています。東が香島郡ですが、白雉四年(653)に茨城郡と那珂郡から八里と七里を割いて行方郡を置いたとなっておりますのでそれ以降は行方郡が東端となりました。南の「佐礼流海(さがのうみ)」は現在のかすみがうら市の旧出島の先端の霞ヶ浦です。流海というのは現在の霞ヶ浦や利根川、印旛沼などが一体の大きな内海であった頃はそこに流れがあり、それぞれの地名で流れ海と呼ばれていました。そして、この佐礼(我)(さが)は現在のかすみがうら市の歩崎付近で地名として「浜」となっています。平安時代の辞書「和名類聚抄(わみようるいじゆしょう)」には「佐賀郷」と表記された地域です。



(ちえこ)

【風の談話室】 《読者投稿》

やすと暮らして(67)

さと女

梅雨入りも梅雨明けも、以上に早かった今年・・・? なにか可笑しかった・・・? 9月に入ってから、気象庁からの見直し発表が・・・? 梅雨入りも梅雨明けも、ずっと後に見直された! やっぱり・・・?

・台風が・・・刈りいれの近づいた稲に被害が無いことを祈る。部落や親戚の新盆参りを済ませた後、4年前に亡くなった友達の家を訪ねる。亡くなったMさんのピザ屋さん・・・心配していたが、2カ月前から開店営業していた。

店主は、凄いいケメン男性です、当面は予約制とか? 近々行こうと思った。店の名前は以前と同じ“Hanana”を踏襲していた。

・ゴルフ場の先にある向日葵畑、顔くらい大きいヒマワリの花が・・・よく見ると殆どの花に網がかかっている。種を採るための向日葵なのか・・・?

・ボランテイヤ仲間、小美玉にある“やすだ農園”を訪問。ここは二町歩(東京ドーム二個分)の面積にイチゴ、鉢植えの花(マリーゴールド)、マンゴー等を栽培している。マンゴー栽培はこの辺り(関東地方)では珍しく多方面からたくさんの方が訪れている。小さなカフェもありマンゴーパフェやかき氷などが、食べられる。此の日もたく

さんのパフェファンが来ていた。久しぶりにホンモノのマンゴーを食べ、その香りの良さに満足し、お土産に買って来たが・・・部屋中にいい香りが漂っている。

・日々のルーティン・・・散歩の最中に、珍しい情景に遭遇。穂が実り始めた田んぼに、軽自動車が見横になっている。通り掛かりの人が110番通報・・・更に別の通り掛かりの人たちが車の中を確認。事故を起こした人は居ないようだ。野次馬をしているうちパトカー2台到着。まだ運転手は行方不明・・・不思議に思いながら散歩を続けた。

・ギター館時代にお世話になった小原先生から連絡が・・・ギター館コレクションの、"ルイス・パノルモ"は、小原先生が持っていたものか・・・と、お尋ねがあった。ギター館を離れて大分経つたのでよく覚えていないが・・・確か、パノルモはカーコレクションに含まれていません。猛暑が続いていますがお体に気をつけてご活躍下さい。いつか逢える日を楽しみにしております。

・朝晩は秋の気配が、集落では早生米(あきたこまち)の稲刈りが済んでいた。9月に入ると一斉に稲刈りが始まるとか・・・? 田んぼの見回りをしていたご主人、イノシシにやられたなと、見ると田んぼの彼方此方に、実った稲が倒れているあとが・・・。いろいろ工夫してもイノシシは賢いからなあ、刈りいれが済むまで、どうかイノシシも台風も来ませんように・・・!

・近所の子供たちが、溜池で釣りを楽しんでいる。
夏休みも残り2日・・・其処に通りがかった叔父
さんに子供たちはいろいろ質問。子供たちにとつ
て、池の事は何でも知っていると書いているよう
です。暫くの間、叔父さんは子供たちに遊んで貰
った。

・午後の散歩。大部涼しくなり汗もかかない1日。
我が家から少し離れた沼の方に歩いて行くと先日
釣りをしていた子供たちの姿が・・・近づいて行
くと大喜び。

叔父さんは気を良くし、餌のつけ方など教えたり
して、今日も遊んで貰った。

この沼にはフナやクロメダカ、大きいドジョウや
ザリガニなど、子供たちの喜びそうなものがたく
さんいる。

子供たちの声が聞こえ遊んでいる姿を見ると、と
ても、元気を貰えた。



(ちえこ)

石岡地方のよもやま話

木村 進

(17) 三光の宮

最近天候も極端になってきた。これも地球温
暖化の影響なのだろう。世界の人口を考えればこ
の先人類はうまくやっていけるのかと心配になる。
自国の利益優先という間違った愛国心のエゴが地
球を破滅に追いやるかも知れない。

今年の中秋の名月(10日)優しく輝いていた。
月の大きさは地球の1/4だから、月から地球を
見たら月の4倍の大きさに見えるはずである。

地球は青いというので、どんなに美しいのだろ
うか?見てみたいものだ。その美しい地球で醜いエ
ゴが渦巻いているのはいただけない。

戦後77年が経ち私を含め戦争を知らずに育った
人がほとんどになった。

しかし人類の歴史は過ちの繰り返しでできた。
さうして、これからの100年をどう乗り越えてい
けるのでしょうか?

ロシアやその周辺国(ベラルーシ、ウクライナ)
へは16〜9年前に数回訪れていたが、訪れる度
に年々昔に逆戻りしているようで心配になってい
た。ウクライナでロシア語教育が学校からなくな
ったと聞いたときには、この国の将来が少し心配
になった記憶がある。でもあの美しい国にロシア
が戦争を仕掛けるとは全く想像もできなかった。

さて、いつもならもうスキスキの穂も目立って
くと思うのだが、彼岸花と同じく大分遅くなって
しまったようである。スキがなければ中秋の名
月も物足りない。

石岡も日天宮、月天宮、星之宮という三光の宮な
るものがある。

歴史は1300年程前からあるともいわれ、古そ
うであるが、あまり紹介されることは少ない。
特に、星之宮は現在なく、総社宮に合祀されて
いる。

元あった場所は、石岡二高のすぐ手前(国分寺の
裏手)であり、小さな公園がある。

この三つのお宮が三角形に結ばれトライアングル
を形成していた。

昔にこのお宮をこの位置に配置したことは、何か
意味を持たせていたはずで今では考察もされてい
ない。

江戸時代に水戸街道(陸前浜街道)ができ、明治
に鉄道が敷かれ、昭和になって国道6号線が開通
したのである。

鎌倉時代の前にはどのような道があったのだろ
うか。

こんなことを考えるのはおかしいのかもしれない
が、まあ、考えているうちに何か気がつくことも
あるでしょう。

三村から中津川で恋瀬川をわたり、田島の方を通
って、日天宮と月天宮(貝地)の間を抜けるよう
な道があったのかもしれない。

護身地藏などもあるが、戦国時代のいわれはある
が、何時からあったものだろうか?

もつとも今の位置は、号国道建設時に移動されて
いるが・・・。

考古学と書物の歴史以外にも地元に残る伝承など
ももう少し研究すると面白いのになくと思っ
てしまおう。



(まさこ)

下士官の手記

燕石(えんせき)

(先月号からの続き)

大陸での日々

11 後宮

×月×日

いつものまにかもう昼時だ。

此処の侍女のようなものが何人も食事を持って現れる。まるで王侯貴族に仕えるように恭しい。入れ代わり現れて豪華な食事をテーブル狭しと並べてゆく。林と二人で食事する。林は当たり前のような顔をして、食べている。少し気恥ずかしい。途中で伝令が入ってきて、

「B頭目から伝令が来て、C屯を攻め落としました。」という。

幾らも抵抗せず、あっさり降伏したらしい。

「隊長殿が後から大軍で来るとも噂になっていて、半数ほどの男たちは逃げてしまったらしいのですよ。」

「戻るまで、二、三日かかるからA屯とB屯をよろしく頼む。」

ということだとか。

「冗談じゃないぜ、なんで俺がやらなきゃならんのだ。B屯は、婿になったお前が見るべきだよ。」

林は、部屋の様子を見まわして、

「隊長、こんなに飲んで大丈夫ですか?」

呆れ顔になって、

「B屯に立ちますから」

と出て行った。

「明日は少し遅く起こしてくれるようお願いしてくれよ。」

「わかりました。」

「それから、交代で見張りに立て。」

「それはもう手配しました。」

「あとで、C屯での戦闘の様子や、C屯にまつわる情報をなるべく詳しくまとめてくれ。」

「わかりました。」

×月×日

この屋敷の裏に回る。そこはやっぱり女たちの館だった。窓からは、若い、年より、大勢の女が、こわごわこちらを眺めている。

ここらあたりの年寄りの女は大概、昔ながらの纏足である。幼いころにきつく布で縛って、大きくならないようにしてしまう。

大人になっても子供のように小さい足だ。このあたりの中国人、満州族の男にはこれがとてもセクシーに感じるらしい。足の大きな女は、身分の低い者又は、シコメということになる。案内についできた長老は邪魔なので、追っばらっしてしまう。ずんずん中へ入って行って、此処の太太を呼んで来いと言いつけた。

大勢の侍女を従えて、ここの太太が出てきた。

「なんで挨拶に来ないんだ。」

「二人行かせたヨ。ご馳走も、土産もたくさん。」

「ふざけるな! あんな小娘をよこして、挨拶だど! 貴様ら俺をなめてやがるのか!」

すさまじい大声に、震え上がる。

「・・・体の具合が悪いので・・・」

「夫人たちみんな一人残らず具合が悪いというの

か? それならば、これから俺が、一人一人ゆっくり見舞いに行つてやろう。」

「・・・」

「俺が怖くてあいさつに来られなかったのか!」

「大人どうかお許しを。」

「俺は大人でも將軍でもない。ただの兵隊だ!」

「でも、大人は強い。恐ろしい。」

「ああ、時々はそうだな。だけど、俺は女をむやみに殺したりはしない。財産もやたらに奪ったりしたこともない。」

「太太、それは本当です。D鎮の女に聞きました。」

將軍は、女を助け、捕虜も助け、子供も、拾って育てていると言っていました。」

「怜愍、それはほんとなのか?」

「本当です。他の行商の者達もそう言っていましたよ。」

「その話は私も聞いたヨ。」

「大人。いえ、タイチヨウサン、失礼しました。」

「わかってくれればいい。昨日来たあの二人の娘は、自分のところの使用人として使つてもいいか?」

「もちろんです。」

「そうか、その手当も払うよ。」

「そんなものはいりません。」

「そうはいかないよ。ただで働かせるわけにはいかない。」

「参、入つて来い。」

外に控えていた少年が入ってくる。この少年は、蘭の弟で、日本語が達者だから従僕として使つてくれという。

林がいなくて困っていたから二つ返事で引き受けた。少しの小遣いをやるとこの少年「参」は嬉

しそだった。

「部屋に行つて、金庫の中から金を持ってこい。」
持ってきた金を、

「少ないがこれは、二人分の支度金だ。」とテーブルに置く。

「大人」

「太太、とにかく受け取つてくれ。二人分の支度金だ。」

後ろに控えている女となにやら長いこと話していたが、

「大人、どうか昼はここで食べて行つてくれ、」
という。

テーブルに座つてお茶を飲んでみると、用意ができたのでこちらへという。別室には、すこし大きめのテーブルがあり、酒肴が並べられている。いつの間にか着飾つた女たちが居並んでいる。上座に座れと手を取られ、豪華な椅子に座らせられる。両脇に女たちが次々に座る。どうやら位の高い順らしい。

太太は、奥に引つ込んでしまひ出てこない。

隅の方では、侍女がしきりに音楽を奏でている。先ほど、太太に話しかけた怜怜も、中ほどに座っている。

第五夫人あたりなのかそれとも、頭目の姪なのか？一人ずつ名前を言つて挨拶してくる。

侍女たちがせわしなく出入りして、次々と料理が運ばれてくる。左右の女が酒や肴をかかわるがわる勧めてくる。考えてみたら、頭目はいないし、長老は実権がない。強力な武器を持った、新しい支配者がここに居る。然も有り余るほどの金を持って居る。征服されてしまった弱い者は、もういやおうなく媚を売るしかないのだろう。そう

思つて見ると、どの女も、媚を含んだ目でこちらを見て居るようだ。参を呼んで、通訳させる。どの女にも夫はいないという。

「頭目たちが居るじゃないか？」

「あれらはもう、男じやない。腰抜けたちだ。ここで男なのは、隊長ひとりだけだ。」

と口々に言う。

「そういう理屈も成り立つか。」

よしそれならばという事で、酒宴半ばで、

「少し休む」と寢室に案内させる。部屋にはいるなり、侍女に向かつて、

×月×日

夜が明けると、二人の女は名残惜しげに出て行つた。テーブルには、また新しい料理が並べられ、乱れた寝台がきちんと作り直される。

朝飯を食べ終わったところに、数人の侍女を従えてこの太太が入つてきた。

「さっきの二人とも此処での夫人にしようとかかと思ふのだがどうだろうか？」

「はい。仰せのとおりです。」

「ところで、本当の夫人はいったい何処なんだ？」

「今、化粧してこちらに御挨拶に参ります。」
と、もはや、すっかりあきらめ顔である。この

若い支配者には到底逆らえないとわかつてきたのだろう。

戦では、いまだに負け知らずなのだから。怒らせたなら何をするかわからない。

「夫人が見えられました。」扉の外で、侍女が言う。扉が開き、侍女を従えた女が二組入つてきた。

先ほどの女たちよりも着飾っている。高く結い上げた髪にはたくさん簪がついている。幾枚もの絹の服を重ねて着ている。手首、足首には宝玉

の輪がはまっている。このあたりの基準では、もう中年に近いだろう。

「第一夫人 王氏」

「第二夫人 金氏」大袈裟な紹介だ。

「なるほど、そうか・ところで聞くが、いったい誰の夫人なんだ？」

皆、その場に凍り付いてしまふ。てっきり自分の身の分は、これで十分に保証されると思つていたのだろう。これからまた、以前の贅沢な暮らしに戻れるとばかり。

「いったい誰の夫人なんだと聞いているんだ！」
重ねて聞く。

「早く通訳しろ！」

前の二人から聞かされていたことが、今更甦り、ここに至つても尊大な態度をとり続ける女どもに對して、むらむらと怒りがこみあげてくる。

故郷の村でも、大百姓は小作人を苛めていた。

「さつさと答えないか！」

広間に怒声が響き渡る。

「・・・大人の夫人です・・・」

ようやく一人が細かい声で答える。侍女たちは皆声もなく俯いてしまふ。

×月×日

大陸に来てからというもの、過去には考えられないような思いもよらない経験をした。偵察に行つた時のことである。

道端にぼろ屑が落ちて居る。近づいてみると、人間だった。老人のようだ。ぜいぜいとあえいで居る。具合が悪そうだった。衛生兵を呼び、手当させた。

「隊長、これは病氣じゃありません、腹が減つて倒れてるだけですよ。」

携帯口糧と、水筒を置く。男は目を開き、水筒の水を飲み、乾パンをかじる。

「ゆっくり食えよ。」

衛生兵のほかに、三名連れて居たので、皆の携帯口糧も出させ、この男にやった。

「隊長、こんなことしてたら、こっちが食えなくなりですよ。」

衛生兵が口を尖らせる。

「貴様は、衛生兵だろうが。弱った者を助けるのが任務だ。俺が倒れた時は、衛生兵や、看護婦が助けてくれた。ある時は姑娘に助けられた。俺たちは半日もあれば部隊に着く。半日歩く位で空腹に音を上げるような弱虫は、俺の部下にはいらん。」

×月×日

一週間ほどして、あの老人が訪ねてきた。老人と見たのは、土埃にまみれていたからで、実際はさほど年の変らぬ若い男だった。すっかり元気になって、あちこち尋ね歩いて、やっとここに着いたという。

聞けば、北京の大学の講師だというが、国民党とは相いれず、命の危険があったので、逃げてきたのだという。

日本語も達者である。S・A兵曹は士官候補生学校に行ってしまったので、困っていた。

「しばらく此処で暮らしてみたらどうかかな？」

「・・・はい」

ということ、たくましくして優秀な通訳が手に入った。軍属扱いで、とりあえずは下士官待遇ということにした。今までの実績があるので、今度はどこからも異論が出なかった。黄という名で、三等兵曹にした。暇があると、難しい学問の話や、国民党軍のことなどをたずねた。最近では共産党の

軍隊も力をつけてきたという。そいつらは見慣れぬ武器を持っていて、下手な正規軍よりも強い。軍旗も厳しいらしく、農民から略奪などはしない。

秘かにロシアの援助を受けているのだという。黄は、そのあたりにも詳しく、ひよつとすると、「アカ」かもしれないが、なあに構うものか。役に立てば良いし、何だかすつかり気が合つてしまつて、向こうもそう追つていゝらしい。

「いつか、この戦争が終わつたら、私のところに尋ねてきてほしい。あなたは、みんなとは違つて、私の友人に成れる人だ。」

「俺も、そう思っている。そつちも探してくれよ。」
なんでも気楽に話せる。病院での出来事も語つて聞かせた。時にはやにや笑つて、

「隊長は、やつぱり英雄だよ。」

「すごいよ」

という。
「俺の話だけじゃなくて、そつちの話も聞かせろよ。」

ある日、これを、と言つて、古そうな本を渡された。中国の春本だという。

「これが読めるようになれば、中国語ももつと上達するよ。上達の早道だよ。」

確かに黄三等兵曹の言う通りだった。今まではちんぷんかんぷんだった言葉だが、それからは少しずつ分かるようになった。

×月×日。

師団本部から連絡がある。

「憲兵隊の抜き打ち査察があるから、心得おけ。」という。

本来ならば、秘密のはずだが、いくつも貸しがあるの、内緒で教えてくれたのだ。然し、心当

たりはない。恐らくは、私をねたむ誰かが密告したのだろうという、というのが、A二等兵の想像だ。

確かに、これまで軍紀違反すれすれの事をしてきた。憲兵隊に目を付けられてもおかしくはない。

「憲兵隊は厄介ですからね。」

「まあ、なるように成れだ。」

事務方の兵士に、不都合な書類の処分を命令する。中隊規模なのに、師団並の金と物資を保有している。これだけでも、間違いなく重営倉だろう。

それにしても、こんな最前線には、憲兵はめつたに現われない。そこどころがどうにも不思議だった。

×月×日。

師団からの連絡通りに、憲兵隊が乗り込んできた。

「貴公が、ここの責任者か？」

部隊のものには、いつも通りになっていると指示を出す。

「ここでは、不正な経理が行われている節がある。」という。

ひとときり事務所を引つ掻き回していたが、証拠など出るはずがない。

「ここでは、赤色分子や、満人の少年を使っているそうだな？」

「その通り、どちらもいい働きをしてくれています。」

「直に取り調べるからここに呼べ。軍の機密を扱う通信隊が、この有様ではな。」

話しているうちに、この連中がいつぞや船で一緒だったことに気付いた。着任して、手柄を上げようと考えたのだろう。階級章を見ると、軍曹だ。

ここでついに、堪忍袋の緒が切れた。

「貴公だと！、貴様、軍曹の分際で、誰にもを言っている！」

怒鳴りつけた。

ほんの数日前に、准尉任官の内示があった。准尉と言えば准士官である。少尉任官の含みがある。いずれ士官の仲間入りだ。

「貴様らここをどこだと思っている。貴様らが一個分隊程度で無事にこれたのは、俺のところの客だからだ。このあたりの馬賊は、ほとんど俺の命令で動く。見ている。」

手を振って合図すると、塀の向こうに隠れていた、匪賊たちが続々と庭に集まってきた。たちまち広い営庭いっぱいになる。

頭目が三人入ってきて、

「大人。何かあったか。大人に何かあったら、わしが許さぬ！」

憲兵隊を恐ろしい目つきで睨みつける。

さっきまでの勢いはどこへやら、憲兵軍曹は青くなっている。

「頭目。心配ない。ただの打合せだ。」

「大人。嘘言うな。こいつらは大人掴まえに来た。」

お前ら、この大人に指一本触れてみる、その首を叩き落としてやる。」

腰の清龍刀を抜いて突きつける。

「まあまあ、頭目、落ち着いてくれ。ここで騒ぎを起こされたら、俺の方がこまる。此の埋め合わせはするから、みんなおとなしく引き取ってくれ。」

「大人がそういうなら、帰る。」

「おまえら、このあたりで見かけたらただじゃあ置かんぞ。」

そういつて出て行った。

「さあ、どうする？」

「はっ。解ったであります。」

あまりの恐怖に震えている。

「どうわかったんだ？」

「はっ。本官の間違いでありました。大変失礼いたしました。」

と、直立不動で敬礼すると、回れ右してそうそうに出て行ってしまった。外に控えていた部下たちから、失笑が漏れる。

「お前ら気を付けて帰れよ。」

だれかが笑いながら冷やかす。どっと笑い声が起こる。

×月×日。

そのあと、茶飲み話になり、みんなで大笑いになった。

出て行った頭目も戻ってきて話に加わった。

「しかし、隊長の脅し文句は聞いているこつちも肝が潰れましたよ。」

「とどきそばにいてこつちも、怖い時がある。」

「あいつら、真っ青になってたな。」

「泣く子も黙る憲兵も、隊長にや勝てんさ。」

「でも、女子供には、やさしいよ。」

「確かにね。」

「あはははは。」

「隊長の指一本で、あいつらの首が飛ぶところだった。」

「俺は、それが見たかったな。」

「あいつら、命びろいしたわけだ。」

「わはははは。」

「それにしても、ここのうわさは聞いてなかったんですかね？」

「何せ、奥地だからな。」

「土地の者は、ここには魔物が住んでいる、と子供を嚇すそうですよ。」

「確かに、隊長は人間離れしているからなあ。」

「お前らも、同類だろう。」

「あはははは」

〈泣く子も黙る憲兵も、隊長にかかつては、子供扱いだ。〉

「それにしても、誰がチクったんですかね？」

「まあ、敵も多いからな。」

「そいつも今頃は、青くなっているさ。」

×月×日。

司令官の少佐から、連絡があつて、この件は不問とされたそうだ。

以来、このあたりには憲兵は現れなくなった。

以前、憲兵とトラブルになった時、こつちはなりたての上等兵だったから、手も足も出なかったが、今は違う。いかに憲兵とはいえ、実戦に強い部隊にはかなわない。憲兵隊全部を向こうに回しても勝てる自信があつた。

×月×日。

ここの駐屯兵力が膨れ上がったので、少し離れたところに、掘立小屋のような慰安所ができた。

将校たちは、だいぶ離れた上陸地点の、料理屋に通っていた。

時には誘われたが、どうもそんなところは性に合わないの、みんな断ってしまった。そのうち誰からも誘われなくなった。

それがいまでは、姑娘の愛とは一日おきぐらいに交わっている。別に女には不自由していない。

部隊の連中も、どういふわけかその方面にはあまり関心がないらしい。そんなことより、兵器の

操作や、無線機の操作に夢中になっている、まじめな奴が多い。

×月×日。

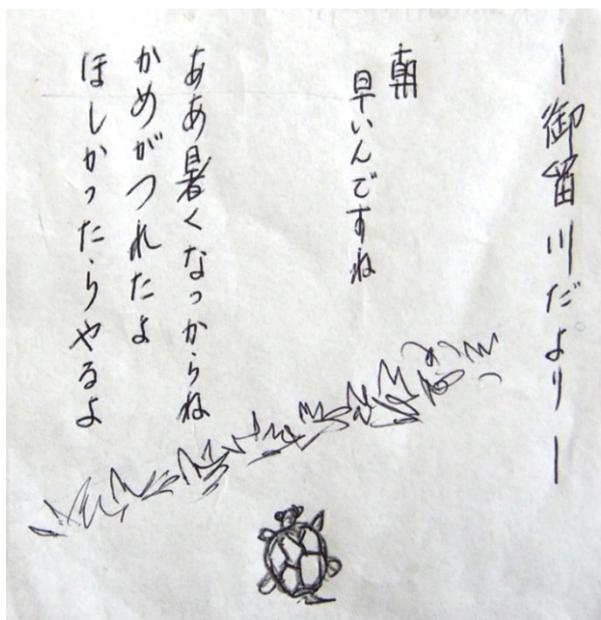
それでも思い立って、慰安所が休みの日に行ってみた。

半分は好奇心である。

(続く)



(ちえこ)



【特別企画】

打田昇三の太平記(25) 卷第十三

○越後守仲時己下(以下) 自害の事

六波羅に陣を置き諸国を支配していた幕府・北条氏の軍勢も各地に起こった抵抗勢力に打ち負けて本拠地の関東へ撤退するしか道が無くなった。其の噂が周辺地域に広がったから、其れまでは僻地で細々と営業をしていた野武士など強盗同然の連中が急に連携し、移動する軍団の侮りがたい敵になったのである。彼らにも見栄や大義名分があるから、地方に隠れていた皇族を迎えて大将に据え権威を高めて勝手に錦旗を拵え「天皇軍」を称した。其の勢力が、先ずは東山道第一の難所とされる番馬峠を抑えて東国へ向かう獲物を狙うことにした。善悪は別として作戦では常道である。

片や、昨日まで天皇を擁して権威を保ってきた幕府軍は一転して賊軍にされたから都を出た時に二千騎ほど居た武士団も自然消滅して七百騎に満たない数になり、それで難所を突破しなければならなくなった。当然だが幕府軍に守られた皇族・貴人などは其の行列に加わっている。

佐々木判官時信が後陣を護り、糟谷三郎が先陣となつて峠道へ向かったのだが、先陣の部隊が峠道に来ると早くも其の両側には楯を並べ矢を向けて待ち構える数千の敵で埋まっていた。是を見た糟谷は「…敵は数が多くても落人の獲物を狙う盗賊の類いであるう…」と判断し「命を掛けて戦うほどの相手に非ず…一気に攻めて蹴散らせ！」と命じた。其処で選ばれた三十六騎が喚声を上げな

から攻撃して来たので先陣に居た野武士たちは「脚本と違う！」と慌てて逃走した。

其処までは良かったのだが朝霧が晴れて是から越えて行く先を見渡したところ、敵は五、六千に増えており山地の要所で一行を待ち受けていた。

糟谷らは道筋に在った辻堂近辺に拠つて後続の幕府軍を待つことにし、程無く幕府軍を束ねる越後守仲時が前方の異変を聞き駆け付けて来たので、糟谷は次のように申し述べた。

「弓矢取る身の死ぬべき處にて死せざるは恥を見る…と申し習わすのは道理です。我らは都にて討死すべき身が一日の命を惜しみ是まで落ちて来ました。今は名も無き田夫野人の手に掛かり屍を路地に晒すのが口惜しく思いますが、敵は此処だけでは無いでしょう。是を撃退しても地元の土岐一族は最初から謀反の張本人なので、美濃国も通さず…更に吉良一族も幕府の命に従わず遠江国に城を構えている…と聞きます。此の敵を全て退治するのは困難です。況や、我ら落人となり人馬ともに疲れて何処まで行けるか分りません。此処は後陣の佐々木をお待ちになり、近江国へ引き返して何れかの城に籠り、関東からの救援をお待ちになるのが良いのでは…」

聞いた仲時は「…其れは私も思ったが、佐々木も今は野心が無いとは言えない。皆の意見を聞いてみたい…」と言つて、辻堂の近くに待機した。其の佐々木時信は三百余騎で従っていたが、仲時の予想した通りに心変わりし「…六波羅殿は番馬峠で野武士に討たれた！」と虚偽の報告をしてから敵方へ転属してしまったから来る訳がない。

仲時は従う軍勢に是までの労を勞い、自分の首を敵に高く買つて貰う様に言い残して切腹した。

其れを見た忠臣の糟谷三郎が「主君に先立たれて無念！」とばかり仲時の短刀を取って自分の身に刺し共に命を絶った。其れを見た他の者（北条家臣）も次々と切腹して其の数は四三二人になったと言う。（其の名は伝わるが、記載を省略する）

○主上・上皇、五の宮の為に囚われし事

付・資名卿出家の事

勿体ぶった題名であるが此の時代の大日本帝國は「万世一系」などと言う嘘がばれて、天皇家一族が醜い争いを展開していたらしい。単純に言えば第八十八代・後嵯峨天皇の後を後深草天皇と亀山天皇の兄弟が継ぎ、其の後は両方から交代で天皇を出す申し合わせをしたが、誰でも握った權威は放し難い。双方の皇族らが「なんちよう」だの「ほくちよう」だのと耳鼻科病院並みの争いを展開して日本中を混乱させていたのであろう。

表題にある「五の宮」は、後醍醐天皇の子で幕府の皇位継承介入に抵抗した護良親王と思われ、其の指示に従った軍隊が反対派を抑圧して天皇の証拠となる「三種の神器」を北朝の光厳天皇から奪ったのだと思われる。当然だが襲われた者は逃げるしか無い。身の危険を感じた日野大納言資名（天皇の近臣）は辻堂に居た僧に頼んで出家しよう、其の際に唱える言葉聞いたのだが聞かれた僧は知らなかった。然し、知らないと言うのも恥ずかしいので「汝は畜生発菩提心（によせちくしようほつぼだいしん）…」と適当な言葉を教えたのである。大納言と共に出家しようとした三河守友俊が是を聞いて「命が惜しくて出家するのだが、自分で汝は畜生なり…と唱えるのは悲しい

…」と大笑いをしてしまった。

それやこれやで追われる立場になった北朝系の皇族・貴族たちは一斉に逃げ出したのだが、行く先も当てが無く従う者も居ない。其れでも逃げる事が出来たのは幸運で多くの者は捕えられ都へ送られた。思えば三年前に南朝系の公家たちが同じ様な目に遭っており其の因果が歴然としていた。

○千劍破（ちはや）城、寄せ手敗北の事

書き出しは「…去る程に、昨日の夜、六波羅已に攻め落とされて、主上上皇・皆、関東へ落ちさせ給ひぬと、翌日の午刻に千劍破へ聞こえたり…」とある。千劍破城が築かれたのは元弘二年（一、三三二）十一月なので、此の出来事は其れ以後になるが、元弘三年四月には既に落ちていたので、知らせが届いたのは其の短い間のことになる。

城を包囲していた政府軍にはショックなニュースで誰でも考えるように「…本部（六波羅）が壊滅したのに出先機関が頑張る必要は無い…早く、此の場を撤退しよう」と千劍破城を取り囲んでいた政府軍は一斉に移動を開始した。そうは言っても山中の城を包囲していた大軍勢が順調に引き揚げられる訳が無い。然も行く先には商魂たくましい野武士が獲物を待ち受けているし、ぐずぐずしていれば城兵に追撃される。狭い場所では我先に撤退するのであるから道を失って切腹したり谷底に落ちたり、逃げる馬に蹴落とされたり、十万余騎の軍勢も残り少なく、然も馬や鎧・兜を捨てて逃げたのだが、大将など幹部たちは無事に奈良へ戻れたというから立派なものである。（巻第十完）

（続く）

〔編集後記〕

今月号は都合で発行が一週間遅れてしまいました。ここに深くお詫び申し上げます。また先月、先々月に掲載しました今泉前市長の講演会「歴史くいま伝えたいこと」はコロナ感染予防のため延期となりました。また開催が決まりましたら、本会報にも予定を掲載します。

石岡のお祭りが三年ぶりに開催されます。

（九月17・18・19）しかし、街中の人口減少は歯止めがかからず、商店街の衰退振りは目を覆いたくなる状況にあります。

当会の生みの親である脚本家の白井啓治先生が亡くなられ早三年が経ちました。また亡くなられたのが突然のことであり、また当会の会員も徐々に高齢化が進んで会員数も足踏み状態でしたので、当会の継続も当然危ぶまれました。しかし、霞ヶ浦周辺地域に文化を育むという当会報「風」の理念を継承しようと残された会員の努力で、どうか休まずに十六年をむかえました。そして来年一月には二百号をむかえます。ただ、ことば座の手話舞いは残念ながら今のところ継続できておらずとても心残りです。

会を存続するためには、会員の増員と若返りが必要不可欠です。本会に興味のある方は、話し合いに参加するだけという方、また、会報に臨時に原稿を載せたいという方も歓迎しています。仲間としていろいろ意見交換などしませんか？何か相談などがありましたら遠慮なく会員のどなたかに、ご一報ください。

2022年九月17日（土）

ふるさと「風」の会（木村）